
けいおん！ ～黒の奏でる旋律～

koreel

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ ～黒の奏でる旋律～

【Nコード】

N1414Y

【作者名】

koreel

【あらすじ】

桜ヶ丘。ここに中二から一人暮らしの少年が居た。両親は海外在住。

家は裕福だったものの、心は乏しかった少年こと斉藤 黒一。

彼に友達はいなく一匹狼を通して来た。唯一、信用できたのはギタ
ーと

弓だった・・・。この物語は、そんな彼を大きく変えた3年間であり生涯の

宝物でもある3年間を書き綴ったものである。

更新は不定期気味、作者に音楽の知識があまりない、国語力不足・
・etc

などの不安要素満載の小説です。それでも、よろしければ立ち寄
ってみ

てください。

プロローグ・黒の3年間の始まり（前書き）

初めまして、koree1です。

小説の投稿は初めてではありませんが、まだまだ未熟者です。

皆さんの作品も読んで僕も向上していこうと思っています。

プロローグ、スタートです。

プロローグ・黒の3年間の始まり

・黒一、悪いが俺達はアメリカに移住することになった。

だが、お前は日本にいてほしい。

アメリカ《向こう》でお前を仕事に巻き込みたくない。

分かってくれ黒一……………

あれから2年……。まあ、別に悲しくもなんともないけどな。

どーせ、日本にいても構ってくれないんだろう？

昔から……。いつもそうだ。俺はいつも一人。

トモダチとか、カゾクとかほんとにどうでもいい。

でも、感謝してることだってあるんだぜ？ギターと弓だ。

。。。。
親父からはギター、母親からは弓……。どんだけ不釣り合いだよ。。。。

幼少の頃の家と比べて随分とちっぽけな家だけど2年も経つともはや、

俺の実家のようにも思えてきた……。

今まで一匹狼で中学校生活は通してきた。一応、真面目に勉強した。けど・・・高校になったら、何かを変えたくなってきた。

心の蟠りも何もかも無くして新しい自分になりたくなってきた・・・。

親父に貰ったPRSに母親に貰った竹弓。

今でも大事に使ってる。弓道場にも時々、通ってる。

（桜ヶ丘高校・受験結果の掲示板前）

今年から女子高だったのが共学になったのだ。

俺としてはラッキーだ。家近いし・・・進学率そこそこだし・・・。

結果は当然の如く合格だろう。ちゃんと勉強したしな。

黒一「608・・・608・・・と・・・。お、あったあった。」

周りでも、ぴよんぴよん飛び跳ねてる奴がいたり・・・落胆している奴も

いたり・・・掲示板見るのを怖がっている奴など様々だ。

黒一「ま、確認済んだし帰るか。祝いつてことで外食でいいか。」

俺が帰ろうとすると、後ろから突然声を掛けられた。

唯「あの、すみません！け、結果発表、一緒に見てくれませんか！？」

振り返ると、若干癖毛気味の少女がいた。

黒一「……は？何だよ……。」 唯「じ、実は……。」

唯「一緒に来てくれるはずの友達が風邪で来れなくなって……」

妹も用事で来れなくなっちゃったんです……。」

いや、そんな事情知らねエーよ！だが、その少女の顔がとても悲しそう

だったし断る理由や大したこともないので一応承諾する。

黒一「分かった……。一緒に見てやるからそんな顔すんなって。」

唯「ほ、ほんとですか!？」 黒一「ああ。ほんとだ。」

すると、さっきの悲しそうな顔が嘘のように消えてとびっきりの笑顔に

なった。いや、さっきの絶対演技だろ!

黒一「ほら、せーのでいくからな。」 唯&黒「せーの!」「」

これで、受かってなかったら・・・!?一瞬、ドキッとする。

唯「あ、あった!やったー!!!あ、そうだ。自己紹介遅れました!

私、平沢 唯です。唯って呼んでください!」

唯って……。いきなり、名前で呼ぶのかよ……。お断りだ……。

黒一「俺は、斉藤 黒一だ。」 唯「黒君だね!!!」

……。は?本日、二度目だ。しかも、タメ口に切り替わったし……

唯「黒一君だから、黒君だね!!!」 黒一「いや、斉藤にしろ・
」。

黒一「いや、だめだ。斉藤にしろ!」 唯「黒君だよー!!!」

とが、下らん口論をしていると短めのポニーテールが現れた。

憂「お姉ちゃん!」 唯「あ、憂だ〜!」 黒一「・・・妹か?」

憂「用事早く済んだんだ。お姉ちゃん、この人は?」

唯「あ、紹介するね。掲示板一緒に見てくれた黒君だよ!」

憂「お姉ちゃんがお世話になりました。黒さん。」

黒一「いや、違っただろ！斉藤 黒一だ。（出来た妹だな・・・。）」

憂「あ、失礼しました。黒一さん。お姉ちゃん、あだ名付けるのが好き

なんです！それと、決めたあだ名は絶対忘れません！」

まったくをもつて迷惑な性格だな・・・。妹、苦勞してるな。

唯「黒君、メアド交換しよ！黒一「・・・ああ。」憂「私も！」

メアド送信&受信完了。・・・。。あれ、何か違うかね？

いつもの俺じゃない。こんなに他人と群れたりしないはず・・・。

俺、高校生になってやっぱり変わったのかな？

憂「あゝ、よろしければ黒一さん達も一緒に夕飯どうですか？

といつても、レストランなんですけど・・・。」

唯「とつても、おいしいんだよ！一押しなんだよ！」

うん、どうするか。でも、何かアレだな。

よくよく考えてみたら俺、一人＋男じゃん。気まずい……。

黒一「……遠慮しとく。家族でごゆつくり……唯「ええええ」
「……」

やめてほしいわその顔《演技》周りの視線が痛いわ！

憂「お姉ちゃん、無理言ったらだめよ。」……逆効果……。

妹は必死に姉を宥めている。余計、断り辛い……。

黒一「わ、わかった。目線痛いから、そんな顔すんな！

それと俺、家族いないから。」

一瞬、周りが「へっ？」という空気になる。当然だろうな。

憂「なんか、すみません……。」 黒一「別居してるだけだ。」

黒一「仕事の関係だよ。中二の頃から一人だ。」

そんな空気を壊したのが天然娘の平沢 唯だった。

唯「黒君は寂しくないの？」 黒一「まったく。じゃあな。」

無性にこの話が癢に障ったのでとりあえず家に帰った。

く平沢家一押しのレストランく

平沢・父「黒一君も大変だったんだね。」 黒一「は、はあ……。」

く

黒一「でも、幼少の頃からそんな感じだったし慣れてましたから。」

憂「あ、お姉ちゃん！口にソースが……。」 唯「え、どこどこ」
「？」

憂「動かないでお姉ちゃん！」 唯「ありがと、憂」

シスコンオーラが出てるような気がする・・・ここ妹・・・。

それにしても他人とこんなに喋ったのは何年ぶりだろうか？

ていうか、生まれて初めてだろう。今まで一人だったから。

でも、悪い気はしなかった。むしろ充実した一日だった。

- 俺、新しい自分になれるかもしれない！

ブローグ・黒の3年間の始まり（後書き）

割と、執筆は捗りました。ちなみに作者は弓道部所属です。

ですが、竹弓など僕には到底扱えませんww

黒一君のギターですが、ポール・リード・スミスPRSにしました。

結構、高級のやつにしました。

レスポールとストラトの長所をいいとこ取りしたやつですよ？

よろしければ感想まっけます。

1 黒の奏でる旋律（前書き）

いきなり、タイトルをサブタイトルにしちゃいました。

ていうか、サーバーに接続できなくて困ってましたww

負担がだいぶ大きくなってたみたいですね。

1スタートです

1 黒の奏でる旋律

〔1-1の教室・放課後〕

入学して2週間が過ぎた。クラブは弓道部検討中……。っーか男子生徒少ないなー。

俺を含めても、1組は10人少々しかいねエーぞ！まあ、仕方ないか。

高校生になって初めて友達もできた。下原 亮という俺と同じくらいの体格の奴。

和「唯、まだ部活に入っていないの？」 唯「何か、しなくちゃいけないとは思ってるんだけど……。」

和「はぁ……こうやってニートが出来上がっていくのね……。」
黒「……オーバーじゃないか？」

もしかすると、唯にあえて焦らせるようなことを言っただけをださせようとしているのか？

それとも、ただのボケなのか？結構心に刺さるな……。

唯「クロ君は部活決めたの？」 黒一「俺は、弓道部に入るぞ。」
唯「クロ君……。」

何その、裏切つたなみたいな感じの視線は……。

（後日）

黒一「下原、お前も弓道部だよな？」 亮「ああ。お前も入るんだろ？」 黒一「今日、入部する。」

すると、平沢が割って入ってきた。何やら手に部活申請用紙が握られていた。

唯「とりあえず、軽音部つてところに入部してみました！」 黒一「お前、ギターとか弾けんの？」

そりゃ、意外だな。音楽とか運動とか無縁そうな奴なのに。

唯「ええっ！私、ギターなんて弾けないよ〜！」 亮「どんなクラブだと思ってたんだ……？」

唯「へっ？いや、軽い音楽というくらいだから口笛とかやるクラブかと……。」

……口笛とか、どんだけやる気のないクラブだよ。てか、口笛極めてどうすんだよ……。

亮「平沢……お前、すごいな……。」 唯「えへへ……ありがと亮君」 黒一「……。」

やっぱり、平沢はすげえよ……。色んな意味で……。

唯「はっ！お願い、クロ君。退部していくのつきあってくれない？一人じゃちよつと……。」

確かに、コイツ一人じゃ退部できるか心配すぎる……。軽音部の人も迷惑だろう。

軽音部か……。あつたんだな、そんなクラブ。

黒一「俺も、弓道部に入部してエから手早く済ませるぞ。」 唯「ありがと、クロ君！」

〈音楽室………に、たどりつけない〉

黒「おいコラー！さっさと、行くぞ！！！」 唯「あゝあゝ、クロ君引つ張らないでえ。」

オカルト研とか妖怪クラブとか同じでいいだろ……。

〈音楽室前〉

沢子「音楽室なら、この上よ。」 黒「あ、はい。」 唯「はあ……。」

会談を上って、ようやく音楽室に着いた。ん？天然が震えてる？

律「あなたが、平沢 唯さん？」 唯「はあゝびつくりしたあゝ。あ、はい。そうです。」

律「はあゝ」 ムギ、お茶の準備だ！いやあゝ、入部希望者が二人も来てくれるなんて」

え……二人ってことは……俺も！?!?!?

黒一「いや、俺は・・・律「さあ、入った入った!!!」おい・・・」

（音楽室）

秋山「軽音部へようこそ!」 紬「お待ちしました」 黒一「はあ・・・」

紬「さあ、召し上がって」 目の前には高級そうな紅茶とお菓子が置いてある。

黒一「俺は、甘いものが苦手なんだが・・・」 唯「なら、私が・・・」

完全に、本来の目的を忘れてるよこの人。さすがは天然・・・

黒一「おい、カチューシャ。俺は、入部してきたわけじゃないから。

コイツも実はギター弾けないから退部してきたんだ。」

律「ええええ!!! そうなのか!?! 待って、あと1人入部しないと廃部になっちゃうんだよ!!!!」

黒「知らね。」 律「そんな、冷たいこといわずにせめて演奏だけでも聴いてってよ!」

黒「平沢、いいか?」 唯「うん!」 黒「だ、そうだ。聴かせてくれ。」

翼をくださいのロックverか。にしても、なんだろうこの感覚は・・・新鮮だ。

今まではPRSだけで旋律を奏でてきたが、音が合わさるとこんなにも新鮮なのか・・・。

演奏自体は全然うまくない。けど、この世界はとても広そうだ。

弓道は最寄の弓道場にいけばよいのだ。なら、軽音部に入ろう!

唯&黒「あんまり、うまくないですね(うまくないな)!」 律「ばっさりだー!」

唯「でも、私、この部に入部します！軽音部に！」 黒一「俺もだ。」

律&澁&紬「やったー！ー！ー」 黒一「俺は、ギター弾けるぞ。」 律「おお、そうか！」

唯「すごい、クロ君！ギター弾けるんだ！」 黒一「小4の時からだ。」

紬「あれ？クロ君って、あなたもしかして斉藤 黒一君？」 黒一「ああ。そうだが？」

紬「やっぱり ほら、黒一君の両親と私の両親が仲がいいから・・・。幼い頃に一度会ってたのよ。」

あゝあ、何か親父が言ってたな。 琴吹家とは仲がいいとかで、紬と
いう名も聞き覚えがある。

黒一「確かに、そんな記憶がある。8歳くらいだったか？」 琴吹
「うん」

秋山「へえ、ムギと斉藤君は知り合いだったんだな。」 律「て
ことは……」

ん？何だ……とても、嫌な予感がするぞ……
……。

律「黒一お坊ちやまってこと！？ぷぷぷぷ……い
てっ！何すんだよ、黒一！」

俺が、一発手刀をカチューシャに決めたのだ。お坊ちやま……？
ふざけんな！

黒一「お坊ちやまは禁句だからな！？」 律「わーりやしたよ。」
反省してんのか？

〈後日・教室〉

和「へえ、唯って軽音部に入ったんだ。」 唯「私、ギター弾

くんだ。」

黒一「俺、やっぱり、軽音部に入ることにしたわ。」 亮「ええ！
？弓道部は、入らないの！?!?!？」

）音楽室・放課後

唯「うん、おいしい。」 黒一「おい、練習・・・いや、平沢
ギターは？」 唯「へっ？」

律「じゃあ、今週の日曜にギター見に行くか！」 黒一「それがい
いな。」

唯「ねえ、クロ君のギターを見せて！」 黒一「ああ。これだ。」
漣「PRS!？」

漣「へえ、凄くいいギター持つてるんだな！」 黒一「あ、ああ。
秋山・・・近い・・・。」

漣「ご、ごめん／＼／＼」 紬「漣ちゃん・・・黒一君・・・。」
唯「ムギちゃん・・・？」

律「なあ、クロ！なんか、弾いてみてくれよ！」 紬「私も黒一君のギター聴きたい！」

黒一「そのカチューシャと天然が俺の事をあだ名で呼ばなかったらな。」

律「誰が、カチューシャだ！！！」 唯「えええ〜！クロ君だよ〜！！！」

俺はブーブー言うカチューシャと天然を無視してPRSをアンプに繋ぐ。

そして、適当に曲を決めてそれを自分らしく奏でる。自分らしく・・・。。。。。

紬「黒一君すごい何か・・・黒一君らしい感じだった。」 唯「クロ君、私の先生になって！」

透「さすがは、斉藤……黒一……だな／＼」なぜ、無理してまで名前で呼んだ……。

とにもかくにも、俺は軽音部に入部したんだ……。

1 黒の奏でる旋律（後書き）

進度的には、廃部と楽器の初めの方までですかね。

ちよくちよくオリジナルも入れる予定。次話はオリジナルかな？

感想・アドバイス、まっています。

2 黒＋天然の旋律（前書き）

初めの方はオリジナルの話で、その後はアニメ沿いです。

オリジナルというよりは、黒一の小話みたいなもんですが・・・。

2スタートです。

2 黒＋天然の旋律

（黒一宅）

黒一・父『高校合格おめでとう、黒一！』 黒一「今更、おせーだろ。」

黒一・父『・・・確かに、お前は生活能力もあるしスポーツや勉強もできる。』

だから、中二の時からお前をほっといたわけじゃない。』

黒一「じゃあ何故、俺を置いていった？」 黒一・父『それは、お前の・・・「嘘だ！」』

黒一「言い訳せずに、はっきり言えよ！仕事の方が大事だったって。」 黒一・父『・・・。。』

黒一・父『そのことなんだが・・・また、今まで通りに戻らないか・・・？』 黒一「は？」

黒一・父『俺も反省している……。だから、また一緒に……。』
ほんとに今更な話だな。」

黒一「昔の俺なら考えたかもしれないな。だが、俺も高校になって
変わったんだ。」

友達もできたし、二度と屋敷には戻りたくない。

でも、親父達に育てられたことは忘れてないし今までも感謝
を忘れたことはない。

だからこそ、絶縁なんて考えてもないし恨んでもない。むしろ、感謝してる。

この環境におかれたからこそ、今の自分とこれから期待で
きるようになった。

屋敷に戻ることもなくて、もう二度とないだろう。」

黒一・父『……。随分と成長して、お前も自律したんだな……。
すまなかった。』

最後に黒一。ありがとう……。プツッ!」

電話が切られた。結構、一方的な切り方だったがな。根は腐っていないようだ。

黒一「たくっ！ありがとうを言うくらいなら、いっぺんでも会いにこいつっの！！！！」

俺は、親父達がいなかったら今の幸せは掴めなかっただろうな……

一人ぼつちの時には得られなかった期待と色んな夢を手に入れられた。

ギターだって同じようなもんだろう。バンドを組まなければ手に入らない音がある。

黒一「そして、今日がそのバンドスタートの日か……。よっしや！！！！」

〈待ち合わせの商店街〉

黒一「遅せエーな……………」 律「お、来た来た！」
唯「おい」

と、思いきや、人にぶつかつたり犬をあやしたり……。
まじ、何なんだよ……。

《あと、数メートルなのにたどりつけない……。》

唯「お母さんに無理言つて、5万円前借しちゃった」 黒一「
そんだけありや十分だろ。」

その後、天然に寄り道に付き合わされたり最後の喫茶店でようやく
本末転倒している事に気づく……。

〈10GIA〉

透「女の子なら、ネックが細いやつがいいぞ。」 唯「あ、このギ
ターかわいい」

黒一「まったく聞いてねエな……」 「それ、25万するぞ。」
唯「さすがに手が出せないや……。」

黒一「向こうに安いやつがあるぞ。ストラトとかテレキャス系とか

色々……。」

黒一（眼無視……動く気配なしだな……。） 絀「そのギターが欲しいの？」 唯「うん……。」

漣「私も、あのベースが欲しかった時こんな感じだったな。」

回想からすると、何か秋山のは違う気がする……。

律「私も、あのドラム買うために値切って値切って……。」

店員さんの涙が眼に浮かぶ……。 漣「店員さん、泣いてたぞ。」 やっぱしな。

絀「あの〜、値切るって？」 律「欲しい物を手に入れるために負けてもらうことさ〜！」

そこはドヤ顔するところなのか？

紬「何か、懂れます」「黒」「いや、懂れないほうがいい……」

律「じゃあ、みんなでバイトするか!」 漣「バイトってどんなのするんだろ……」

〈音楽室〉

律「うん、じゃ、ティッシュ配りとか?」 漣「……」
・無理そう……」

紬「ファーストフードとかは?」 漣「それも、無理そう……」
律「じゃあ、これは?」

唯「交通量調査のバイト?」 黒「確かに、これなら大丈夫そうだな。日給もそこそこだし。」

唯「あ、野鳥の会だね!」 漣「うん、これなら大丈夫!」

こうして、何のバイトするかは決まった。にしても、職業病になり
そうなバイトだな・・・。

〈後日・教室〉

黒一「ってことだから、バイト付き合え。頼む、下原！強制で水口
も！」

水口 慶「俺、強制かよ！！！」 黒一「お前、どうせ暇人だろ？」

慶「誰が暇人だ！」

亮「なら、弓道の大会。欠席の奴の分も出てくんね？」 黒一「俺
がか？」 亮「そうだ。」

亮「ウチの部も人数あんま多くねえんだよ。3年生もいねえし。去
年から出来た部なんだよ。」

人数ギリギリだから、お前が来てくれれば丁度なんだよ。再来
週の話だが。」

黒一「部外者だぞ俺。」 亮「じゃあ、大会まで両立すればいい。」
黒一「よし、分かった。」

慶「俺は、じゃあ……黒一「お前は、じゃあもくそもねエ
だろ！強制だ。」

慶「ふざけんな！道行く美女をカウントするなら分かるが、車なん
かカウントしたくねエ！」

黒一「スケベ・変態・痴漢、死ぬ。それを償うために働け。」 亮
「めちやくちやだな……。」

慶「俺はパスだ！……黒一「慶音部の美女を一日中、拝め
るぞ。」是非、やらせてください。」

コイツ、冗談で乗ってきやがった……。まあ、単純な奴のほうが
扱いやすくていいのだが……。

〈放課後・音楽室〉

黒一「とうわけで、鴨を二羽連れてきたぞ。」 亮「おい……。」「 慶「水口 慶です！」

黒一「あ、コイツは……。慶「あー、何でもないです！」 ち
イ！。。。」

唯「クロ君、亮君、慶君！私のために、ありがとう！」 慶「いえ
いえ^^」

くバイト当日・とある道路前く

慶「うお、お、お、イイイイ！……！何で、俺だけむさいおっ
さんなんだよ！……！」

ふふっ！調子に乗るからだ……。無論、俺は亮とペアだ。ざまー
ww

亮「……。おい、お前てきとー過ぎだろ。」 黒一「こんなもん、
てきとーにやっつてなんぼだ。」

俺からすると、てきとーにやってもバレねエだろうし金さえ入ればこっちのものだ。

こんな感じで一日目はやり過ごした。そして、二日目で問題発生！変態が逃亡しかけた。

が、「男が約束破るのは恥ずかしいぞ！」とか言ったらすぐ戻ってきた。

そして、二日目も終了。水口は病的にやつれたような顔してたが・・・。

「はい、おつかれさまでした。」 『ありがとうございました！』

日給80000 × 2 × 7 + 500000 = 合計：1620000円 まだ足りんな。

紬「まだまだ、足りないわね・・・。」 漣「あと何回かバイトするか・・・。」 唯「あ・・・。」

唯「やっぱり、これはみんな自分のために使って!」 黒「いいのか?」 唯「うん・・・。」

慶「けど、それじゃ欲しいギター買えないよ？」 黒一「お前の分は俺に貢げ。」 慶「なにっ!」

唯「早く、皆と練習したいから……。だから、もう一度楽器店に付き合ってくれる?」

こうして、慶音部+@によるバイトでギター購入作戦終了。。。

〈10GIA〉

黒一「ムスタングとかどうだ?一応、初心者向けのやつだぞ。って……おい……。」

結局、あのレスポールに行き着くのかよッ!素直に金受け取っときよッ!

黒一「あ……ねえ、黒一君。ちょっと協力してもらってもいい?」
黒一「……まさか……。」

〈レジの前〉

紬「あの〜……。」「店員1」「はい？」 紬&黒「値切ってもらってもいいですか？」

やべエ……。地味につつか、普通に恥ずかしい……。店員も「はあ？」とか言ってるし……。

でも、大丈夫だ。なにせ、ここは親父がよくしてた店だからな。グツジョブ親父！

店員1「ん……。？あ、あなたは、社長の娘さんに斉藤様のところの黒一さん！

カチャ カチャ カチャ カチャ……。こんなもんで……。紬「もう一声〜」 黒一「そこを何とか。」

店員は泣きながら、電卓をもう一度打ち直して5万円にしてくれた。さすがに、鬼畜だったか……？

紬「そのギター、5万円で売ってくれるって！」 唯「どうやって、負けてもらったの!？」

紬「実は、ウチの系列のお店で……。」「黒一「親父が頻繁に使ってた店だったからな……。」

唯「ありがとう、ムギちゃんにクロ君！必ず返すから！！」
絶対、
嘘だろ……。

こうして、平沢は何とか念願のレスポールが手に入ったとき。めでたし、めでたし。。。

〈平沢家・side唯〉

遂に、あのギターが手に入ったんだ！これからは、いっぱい練習しなきゃね！ふんすつ！

唯「ギユイイイン！！！！うわあ、ミュージシャンみたいでかっこいい！！」

憂「お姉ちゃん、うるさい……。」「唯「あ、ごめん憂……。ついで、興奮しちゃって……。」「

だって、凄く欲しかったギターが手に入ったんだよ！名前は、何てゆうんだっけ？

一日も早く、クロ君に追いつかなきゃ！色んなこと教えてもらわな

いとね！

（後日・音楽室）

『おおおおお〜！！！！』 黒一「ギター持つとそれっばいな。」
律「似合ってるぞ、唯！」

唯「えへへ・・・ねえ、ライブみたいな音出すにはどうするんだっけ？」 黒一「アンプに繋ぐんだ。」

平沢は、レスポールをアンプに繋いで弦を適当に弾いた。

ギユイイイン！！！！ それは、軽音部というなのライブの始まりの音に聞こえた。

漣「やっとスタートだな。私達の軽音部・・・。」 黒一「ああ。そうだな。」

律「夢は、武道館ライブ！！！！・・・卒業までに！」 黒一
「無理だ。」 律「おい！」

俺らがグダグダ喋っていると、平沢が……「アンプで音を出すのはもう少し先だね……。」

黒「ば、馬鹿、ボリューム下げろ!!!」 唯「へっ!……ギ
—————!!!……。」

俺は、とっさに耳を塞いだが平沢は至近距離で直に聴いたのでグロッキーだ。

澁「アンプから抜く前に、ボリューム下げないとこっとなっちゃうんだよ……。」

唯「それを先に言っ……。」 黒「……つぶねエー。」 唯「クロ君ずるい……。」

相変わらずのグダグダさ……。けど、ようやくスタートなんだよな……。俺らのバンド。

く弓道場く

完全に忘却していた………。弓道の大会に出るって言ったんだっけ？

約束通り、大会には出なければならぬ。弓道暦は中一から始めたので4年目だ。

正直、だるいが自分の腕を試すいい機会でもある。それに、大会も初体験だからな。

黒一「皆中が二連続か。だいぶ、調子いいな。個人技だけでも入賞したいところだが……。」

俺の使ってる竹弓は上級者向けのやつだ。扱いこそ難しいが、使い手に馴染むのだ。

他に、豆知識を言つと弓を引く際につけるかけ《・・・》というグロープがあるのだが、

自分の癖が全てかけ《・・・》に移るのでいくら上級者でもかけ《・・・》が変われば初心者同然になるのだ。

だから代わりのないもの・・・つまり、かけ《・・・》がえのないもの。語源はかけ《・・・》から来ている。

2 黒＋天然の旋律（後書き）

今回は、ポケ専用モブキャラの水口 慶君を追加しました。

基本的には、変態&アホ&ポケのやられキャラです。

感想・アドバイス、まっています。

3 黒と中間テスト（前書き）

言い忘れてましたが、僕の学校は振り休などで5連休です。

3スタートです。

3 黒と中間テスト

（下校中）

部活も終わって下校中の俺。今日は、天然にコードを色々教えてやった。

真似をすると、アイツ指が何回もつたっけ？指のストレッチも教えてやった。

ちになみに、弓道の大会の話だが個人技は優勝できた。個人技はね・・・。

団体の方はギリギリ入賞できなかったな。先輩達は落胆していた。

個人技の試合は、最終的には命中率で決まる。俺は、ほぼ真ん中の中させた。

表彰状も貰ったが、先輩達や亮を差し置いてというのは何か気まずい・・・。

黒「そっぴゃ、中間テスト近かったよな。だるリイが、勉強しないわけにもな・・・。

はア〜。・・・平沢って、勉強してるのか・・・。・・・?」

何となく、予感させるように平沢の名前が浮かんだ。・・・何も、起きないよな・・・？

（試験当日）

黒一（出そうなどところをかなり絞って勉強したからな。おっ！この問題もやったな。）

カリカリカリカリ・・・。まあ、これくらい解けて妥当なんじゃないか？

side 亮

亮（だいぶ、ノートも2・3回書き直したからな。100点狙えるんじゃないか？）

カリカリカリカリカリ。よし、この調子でいけば大丈夫そうだな。

side 慶

慶（やべエ・・・。テスト勉強したんだけどな・・・。追試確定だ

な・・・・・・・・・・。）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。親への言い訳と追
試対策のサポーターを考えねば・・・・。

↓数日後の音楽室↓

黒一「何とか、テスト終わったな。」 紬「高校になって難しくな
ったわね。」 漣「だな。」

琴吹はあんなこと言ってるが、余裕そうだな。追加、秋山もだ。

黒一「おい、アイツは色んな意味で終わってないか・・・？」 唯
「あはは・・・・・・・・・・。」

おいおい、生氣すら感じられないぞ・・・・。追試は確定な雰囲気だ
な。

唯「クラスで2人だけ・・・・追試だそうです・・・・（12点）。」
黒一「予感的中だな・・・・。」

紬「ま、まあ、今回は勉強の仕方がまずかっただけよ……。」
律「そ、そうだぜ！」

唯「勉強してなかった。」 黒「論外だな。」 澁「ダイレクトに言うな……。」

唯「でもね、コードいっぱい弾けるようになりました。」 律「その集中力を少しは勉強に……。」

唯「ムッ！そういう、クロ君達は何点だったの？」 律&黒「私（俺）か？」

俺は95点。 田井中は89点だった。 お、平沢が萎えてる……。

唯「こんなの、りっちゃんのキャラじゃない……。クロ君……信じてたのに……。」

何を期待してんだよ、この天然が……。

律「なあ、クロ？」「ああ？」 お前、勉強できたんだな……。「る

せエ！」

（後日・音楽室）

唯「ん〜、ようかんおいしい〜 あ、追試の人は合格点取るまで部活動禁止だつて。」

おー、そうか。部活動禁止か……。……

『ええっ!?!?!?!?』 漣「結構厳しいな。』 黒一「そんなことだろうと思った……。』

律「じゃあ、ここに居るのもまずいんじゃない……。』 唯「大丈夫だよ。お菓子食べてるだけだし。」

黒一「今日も、一段と天然が激しいな……。』 紬「でもそれつて、まずいんじゃない……。』

漣「そうだぞ唯。このクラブ自体無くなっちゃうかもしないんだ

ぞ！」 黒一「俺、忘れんな。」

漣「あ、つい・・・ごめん・・・。」 黒一「大丈夫だ。お前がいなくても支障はない。」 唯「ひどい！」

俺って、そんなに存在感なかったのかよ・・・。いや、周りの面子が個人的すぎるだけだろ・・・。

唯「でも、私皆と練習したい！だから、頑張る。」 黒一「じゃあ、精々頑張ってくれ・・・ッ！」

秋山に殴られた。さすがに、人事すぎたか？冗談のつもりだったんだが・・・。

漣「人事じゃないんだぞ黒一！」 黒一（いや、本当に人事なんだが・・・。）

でも、平沢って頑張るとか言っときながら勉強しないタイプの人間なんじゃ・・・？

いかん・・・。また、予感が・・・。まさかな。さすがに、常人なら焦るだろ普通。

「追試まであと6日」

黒一「おい、お前ら……。菓子ばっか食ってないで練習もしろよ。……。」

律「だって、唯がないと張り合いがないんだもん。」 漣「その割りに、よく食うな。」

いや、そういう問題でもないと思うんだが秋山さんよ……。……。

「追試まであと2日」

漣「ちゃんと、勉強してるよね……。唯……。」 律「だいじょう……。心配になってきた……。」

俺も、アイツがだらけてる姿が目浮かぶぞ……。

紬「そうだわ！今晚、励ましのメールを送ってみるのはどうかしら？」 漣「いいな、それ！」

俺が、励ましのメールを・・・？このまま、まともに送ったらツンデレじゃないか・・・。

よし、捻くれていて尚且つアイツがやる気を出すメールを思いついた。

～その晩・side唯～

どうしよう・・・追試まで後二日なのに勉強全然できていません・・・

ピピピピピピピ！ どうやら、メールが着たみたいです。

唯「あ、澪ちゃんからだ」 ありがとう あ、ムギちゃん！お菓子かあ～ よし、頑張ろう！

あ、りっちゃんからだ！ん・・・？ふふふふっ クロ君からも着てる！」

黒一『このままだと、リードギターは俺になるな。安心しろ。お前が居なくても廃部にはならん。

だから、緊張しなくていいぞ。 - - E N D - - 。

唯「ひ、ひどいよ、クロ君！……ひつく！グズン
！……。」

（次の日・音楽室（追試まで後一日））

唯「澪ちゃん助けて！全然、勉強できなかった！」 澪「ええっ！
勉強したんじゃないの……？」

黒一「予感、またまた的中……。」 律「何か言ったかクロ？」
黒一「いや何でも。」

唯「だって……クロ君……が酷い……メール……送ってく
るから……ヒック！グズン！……。」

あ、やっちまった。何か、全員コッチがん見してくるんですけど……
……。

澪「唯、ちよつとメール見せてみる。……
ろ……い……つ……！！！！！！」

黒「……いや、あれは俺なりのエールだ。っと、あぶねエ！」

律&紬「お見事！！！！」

俺は、振り下ろされた拳を手で受け止めた。もう、同じ手はきかん。

漣「にしても、言い方ってもんがあるだろ！よし！特訓しよう！」
そうか、頑張ってくれ。」

漣「お前は強制だぞ黒一！お前のせいでもあるんだからな！」いや、モラルとか色々あるだろ！？」

つーか、俺があんなメール送らなくてもあんなにはならなかったと思うぞ？

だが、断りきれない……。どうするか……。黒一、ちよつといいか？」ん……。亮……。？

亮「コイツの勉強みてやってくんね？」
となりに居る慶^{バンリ}を指差した。

黒一「全力でお断りだ。俺は、平沢の勉強をみてやらねばならん。」
慶「……………」

水口は、遂におかしくなったのか・・・狂ったように笑いながら音楽室を後にした。

アイツ、前に勉強教えたとき全然理解しようとしてなかったからな・・・。

Do you understand?と、言ったら「understandって何だっけ?」とか言い始めた・・・。

く平沢家く

あゝ、俺は今平沢という名の馬鹿に勉強を教えている。秋山、琴吹と協力して…………。

そのうち、真鍋が差し入れのサンドイッチを持ってやってきた。

和「唯ね、私が熱を出したときプリント毎日持ってきてくれたの。」

まあ、その優しさというか友達想いなところがとりえでもあるからな。

唯「私、風邪ひいたことなくて……………」
黒一「馬鹿はなんとやらだな。」
黒一「……………」

いや、だってそう思うだろ。この設定自体コレをいうために作られたようにも思えてくる……………」

その後、お喋りは続いて無駄に時間を浪費した。ほんと、無駄にだ。そして、本題に戻る……………」

黒一「よし、じゃあ、ここやってみる。」
唯「え」と……………」
……………」
出来た！」

漣「これだけ解ければ合格点くらい取れるだろ。」
琴吹「これで追試もバッチリね。」

唯「ありがと、漣ちゃんにムギちゃん！……………」
それに、クロ君も。」
黒一「ああ。」

まあ、大丈夫なんじゃね？秋山や琴吹が教えたんだから。何とかなるだろな。……………」
大丈夫か？

（数日後・音楽室）

あ、今日は追試のテスト返しの日だったよな。・・・大丈夫だよな。
・・・俺の予感よく当たるからな。・・・。

唯「み、みんな……。ひゃ……。100点取っちゃった！」 溲
&黒「極端な子（奴）！」

琴吹「これで、追試は終わったわね。お疲れ様」 唯「ありが
と、ムギちゃん」

黒「コード覚えたんだろ？ちょっと、弾いてみる。C Am7
Bm7 G7弾いてみる。」

唯「バッチリさあ！xでもyでもなんでもござれ！」 『ん？』
何だよソレ……………。

黒「お前もしかして……。忘れたとかじゃ……。その通りです。

「お前はどんな脳してんだよ……。」

透「……黒一……唯の事……頼んだぞ？」 黒一「お前まで、ボケ始めたか……。」

黒一「もう無理だ……俺がどんな手を使ってもコイツは助からん。」

唯「へっ？」

「へっ？」じゃねえよ！また、振り出しかよ！もう……
……萎えました……。」

慶「やったぞ、クロ！追試にござるか……」「天に召される！」「うお！何てダイレクトな……。」

慶は亮ハシリに助けてもらったらしい……。もう……。疲れた……。投げ出したい……。」

3 黒と中間テスト（後書き）

このまま行くと14話で完結・・・？なんてことにはなりませんよ
？w w

もちろん、今までの話が1話で全部収まっただけです。

感想・アドバイス、待ってます。

4 黒と合宿 part 1 (前書き)

さすがに、分割しないと話が保たない・・・。

と、いうわけで何分割かしてみたいと思います。

それと、この part 1 は半分・オリジナルになります。

4 スタートです。

4 黒と合宿 part 1

〔音楽室・放課後〕

漣「合宿をします！」 唯&律「合宿!？」 黒「あ、そう。」
はい。こんな感じですよ。

漣「言っとくけど、朝までみっちり練習・・・着ていく服買わなきゃ」「まあ、頑張れ。」「・・・。」「

俺は人事(つーか、半分人事)みたいに適当にスルー。平沢達は趣旨を分かかっていない様子。

漣「違う!夏が明けたら学際でライブだろ!?!それなのに一度も音あわせしてないなんて・・・。」「

唯「高校の学園祭って凄いなだね!？」 律「おう!そうだよ、唯!」「

それから、お化け屋敷やらメイド喫茶やらで完全に話が反れたところで秋山の制裁が加えられる。

そして、琴吹もちょうどやってきた。いつも通り、菓子はバツチリ
みたいだ……。

紬「マドレーヌ……食べる……？」

黒一（何故、そうなる……）

そして、琴吹にも合宿とその趣旨を伝えた。俺は行く気ねエがな。

紬「合宿っ！？行きたいです！?!？」 黒一（こいつも、趣旨間
違ってねエか……？）

まあ、仮にも真面目なお嬢様だ。一応、練習は真面目に取り組むだ
ろう……。

問題は天然娘とデコカチューシャだ。アイツらは恐らく遊ぶ事しか
考えてねエだろうな。

黒一「だが、場所とかどうすんだ？費用は？スタジオ付きの別荘と
かありや別だが……。」

透「そ、それは……。」 黒一「あ、ちょっと待て
よ……。」

ん・・・？あるじゃねエか・・・。ウチんとこの親父持ってたじゃねエか・・・。

もう、あの屋敷も他人の家のように思えてきたな・・・。うん、自律したということか？

紬&黒「ありますよ（あるぞ・・・）。「あるんかい！！！」
完全に忘却してたな・・・。

唯「だったら、クロ君のことでムギちゃんのところ。どっちの方を使わせてもらう？」

黒「俺のところは、どうか分からない。あ、やっぱ無理だ。親父にお願いなんてごめんだからな。」

透「そんなにパパが嫌いなのか・・・？「パパ？」／／父さん！
／／／／「まあな。色々あんだよ・・・。」

やっぱし、秋山は子供っぽいところがあるな。内面はかなり弱そう。
・・・。

黒一「すまんが、琴吹頼んだ。練習頑張れよ……『へっ?』……
何だよ……。」

唯「何で、クロ君行かないの!?!?」 律「そつだぜ!皆で行か
なきゃ意味ないだろ?」

黒一「俺は個人的に練習する……。それに、考えてもみる。問題
があるだろ「何が?」

紬「性別……かしら……?」 黒一
「その通りだ。だから……漣」でも、それじゃあ……。」

漣「音合わせするのに、黒一が居なかつたら意味ないだろ……?」
黒一「そりゃそつだが……。」

紬「大丈夫よ!部屋別だし、黒一君なら信じられるし!」 唯「そ
つだよ、クロ君!」

そんなに言われて断る気も起きねえし、まあ、いいや・・・どうでもいいや・・・。

黒一「OKOK・・・・・・・・チャントサンカシマス・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
」

というわけで、何か参加することになったらしい（人事）。

弓道場への通り道

気晴らしに矢でもぶっ放しに行こうと思った。一応、精神統一のため・・・・・・・・。。。

母親から貰った竹弓と鷹の羽の矢が4＋棒矢2本が入ったケースをしょって弓道場に向かう。

耳にはイヤホンをつけて何か違和感があるがそれでも弓道場に真っ直ぐ向かう。

漣「あ、黒一じゃないか！」 黒一「ん・・・？秋山か・・・どうしてこんな所に？」

漣「私はいいい歌詞が思い浮かばないから散歩に……ねえ、黒一。それ、弓と矢？」「ああ。」

漣「へえ、黒一って弓道習ってたんだな。「今から気晴らしに撃ちに行くところだ。」

漣「私も、行ってもいい？」「別に構わんが……マナーは守れよ？色々あるんだ。」

そうか……そついや、学際でやる曲はオリジナルの方がいいよな……

俺も、曲を考えてみるか……

（弓道場）

黒一「上から傍観できるようになっているが、くれぐれも正座でなあと、ジロジロ見すぎるな。」

まあ、今は、人がいねえし立ってても大丈夫そうだな。「うん。分かった！」

俺は、受付を済ませて下に降りる。弓を袋から出して弦を弓に張る。前がけ+かけ装着。

四本の鷹の矢を取り出して床に置く。二本を持って、一本は弓に引っ掛ける。

弓の放つまでの過程を行い、狙いを定める。肩の力を抜き矢を放つ。
・・命中だな。

side 漣

へえ、黒一ってギターだけじゃなくて弓まで出来るなんて凄いな
私、スポーツとかそういうのにも興味あるからなんか興奮しちゃうんだよなあ

漣「何か、こっちが緊張しちゃうなあ。あ！当たった！

ギター弾いている時だけでも弓を引いてるときの黒一もカッコイイな！」

side 黒一

黒一「ふう……満足だ。ん……？アイツよくずっと見てられたな……。飽きることなく。」

もう、50本くらいは撃つたぞ！正座してとなるとかなりキツイは
ずだが……。

未だに、目を輝かせている。そんなに、面白いか……？

く帰り道く

溲「やっぱり、弓引くのにかがいの力があるのか？」 黒一「そうだな……
この弓は13kgだ。」

正直、高校生ともなれば女子でもある程度は引ける。あ、そうだ！
ゴミ処分ついでに……。

でも、こんなもの普通受け取るか……？まあ、物は試した。

黒一「じゃあ、これをやるよ。ゴム弓つって練習用のやつだ。貰
い物だが俺はもう使わんから。」

マニユアルも付けといてやるから……。一応、3500円
相当らしいぞ。」

漣「い、いいのか、本当に？」ああ。是非とも受け取ってくれ。」
マジかよおい……。

というわけで、ゴミ処分兼お株もあがったという一石二鳥な結果だった。

漣「ありがと黒一！いい歌詞も浮かびそう！気分転換になったよ！」
「そりゃ、よかったな。」

ここで、秋山とは別れた。疲れたので寄り道はせずに真っ直ぐ家マンションに向かう。

（自室）

黒一「さてと、あの馬鹿二人の対策を講じなきゃならないな……。
遊ぶ気満々だったし……。

それと、オリジナルの曲を考えるんだっただな……。」

とりあえず、ベッドのダイブ。つつい、そのまま寝てしまった……。

side 溇 (おまけ)

溇「うーん、こうかなあ……。だめだ！思
い浮かばない……。」

私は黒一に貰ったゴム弓というのに目をやる。ちょっと試してみよ
うかな……？

マニュアルを読んでみる……。そうやら、一から全て載っており
超初心者向けのようだ。

マニュアルに従ってゴムを引いてみる。

溇「う……意外と、重い……。そろそろ放そう……。ブン！……
いったあああ！！！」

どうやら、髪が絡まったらしい……。抜けてはいないが相当痛か
った……。

よく見ると、髪の長い方は髪を留めてからお使いくださいと書いて
あった……。

4 黒と合宿 part 1 (後書き)

文章稼ぐために、ある程度オリジナルを長くしました。

次回からいよいよ合宿です！黒一君の別荘は使ったのかな・・・

・・・？

感想・アドバイスまっけます。

4 黒と合宿 part 2 (前書き)

黒と合宿の part 2 です。特に、言いたい事はないです。

強いて言うならば、ゴム弓は誤射すると失明したりガラスも割れます(薄い奴)。

それと、ド素人作詞のオリジナルの歌詞が登場します(質は低め)

苦手だという方は遠慮せずスルーしちゃってください！

どうでもいいですねww 4 part 2 スタートです。

4 黒と合宿 part 2

（自室）

夏休み、突入しました……。正直、合宿に行くのは今でも抵抗があるくらいだ……。

いや、そうだろ？若い男女が3泊4日だなんて考えられるか？規制もないのに……。

それとも何か？俺の感覚がおかしいのか？それとも、アイツらがおかしいのか？

しかも、その別荘には実は俺も行ったことがあるらしい……。

だが、そんなこと考えても仕方ないのでスーツケース・PRS・弓セットを持っていく。

ちなみに、弓のセットを持っていく理由は精神統一するためだ。

向こうはプライベートビーチだろうし、母親がたてた小さな道場もあるらしい。

まあ、長々とした解説はこれくらいでいいだろう。

黒「弓とギターが高張るな……。まあ、素引きしないと俺落ち着かねエし……。」

時刻は7：40分。後、10分少々で着くかな……。

（待ち合わせの駅前）

黒一「誰もいねエな……」「おい、黒一！」「……秋山か……」
「 漣「早いな。」 黒一「少しな。」

漣「あれ、弓も持っていくのか？軽音部の強化合宿なのに……」
弓引かなきゃ落ち着かねエんだよ。」

五分ほど経って、二つの影がこっちに近づいてきた。

律「おい、漣！クロ！」 紬「遅くなってごめんなさうい！」

デコカチユーシャとブルジヨワもきたようだ……。俺は、お坊ち
やまは引退したからな！一応。

律「ん？クロ、何だそれ？」弓だ。「……何で、そんなもん持っ
て行くんだよ……」秋山に聞け。」

これ以上の説明はだるい……。平沢のリアクション聞くのが一番だるそうだな……………。

秋山に説明を任せて、俺達は平沢を待つ事に……………。

律「へえ、さすがはお坊ちゃまだな　「矢をぶつ放すぞ……………」
……………満更でもないように言っな！」

紬「そういえば、お母さんが弓をやってらっしゃったのよね？」

黒一「ああ。そうだ。」

こうして、無駄話で時間を潰して約束の8:00になった……………。

黒一「アイツ、まだ寝てんじゃね？」　漣「ま、まさか……………電
話してみるよ……………」

漣「……………おはよう……………
『じゅめんなさ〜〜い!〜!〜!』……………プチッ!」

電話を切った。やはり寝てたか。今日も絶好の天然日和ですな社長
!.....なんでもない。

〔電車の中〕

座席は、俺が反対側の窓際に座っている。疲れた体を労うために仮
眠をとる.....。

唯「ふう〜、何とか間に合った〜.....。あれ、クロ君それ何？」
秋山に聞け.....。「何故、私!？」

そりゃ、一番面倒くさくなくて説明係に持ってこいなのは秋山だろ。

律「なあ、何でクロはいつもやつれてるんだ？「オーバー」だろ.....
原因の一つとしてはお前だ.....。」

律「なんだよ〜!」「お前だけじゃないが、そのボイスと無駄に働く
頭のせいだ。」だから何だよ？」

.....。適当に、田井中をあしらって精神をワンダーランドに飛ばす.....。

く目的地到着・琴吹家別荘・1く

黒一「なんだかんだ言っただけが一番小さい別荘なんだろう？」
「そうなの……。」
『ええっ?!?!?』

一応、俺だってお屋敷生活をしていて琴吹家とは親しかつただけはあるのだよ。

漣「これで、一番小さい別荘……?」
律「やっば、クロもおぼっ……いてっ!まだ、言っていないぞ!」

手刀で勘弁してやる。だが、7割程の力は込めた。結構痛いと思う……。

黒一「言い切ってしまったら矢を撃たねばならんからな……俺
なりの優しさだ……。」

律「なんだよソレ……。」
唯「おゝい、二人とも早く早く!」
黒一「るせエ!お前が言っな!」

集合時間に起床した奴にだけは言われたくねエよ！はあ・・・大丈
夫なのか軽音部・・・。

くスタジオく

別荘の数々の調度品を見物しながら、スタジオに向かった。余談だ
が、道場もあった。

黒一「よし、練習するか。」 漣「あれ、唯と律は？」 紬「ええ。
さっきまで居ただけど・・・。」

すると、秋山が鞆からゴソゴソと何かをとりだした。カセット・・・
？

黒一「カセット・・・？」 漣「昔の軽音部のライブ・・・。」
紬「へえく。」 ジャンジャンく

そついや、桜校祭の軽音部のライブは昔有名だったんだよな・・・。
俺達より・・・。

黒一「断然、うまいな。」 漣「何か、負けたくないなって・・・。
」 紬「でも・・・。」

紬「私達なら負けなと思う……」黒一「このまま行けば間違いなく敗北だ」おい！

漣「まったく、黒一はいいところで水を差す……」よし、あつそぶぞー！「オー、イエー！」

漣「黒一……濟まなかった……」ああ。分かればそれでいい……」
「ムギも早く来いよ！」

黒一「俺は、矢を撃ってくる……一時間したらそっちに行く……」
「漣「ええ!？」

黒一「なんなら、矢取りやってくれるか……?」漣「私は練習するから……」

どうせ、寂しがりだから平沢達のところに飛んでいくだろうな……
もう、目に涙貯めてるし……」

漣「私も行くう〜！」 黒一「おい、遊ぶのは昼過ぎくらいまでにしとけよ。マジでな。」

それぞれが別れて、俺は存分に矢を放った。潮風が心地よい……。時が経つのは早く、一時間程たった。名残惜しいが一応現地に向かう。

〜 琴吹家・プライベートビーチ〜

うわあ〜、本来の目的を完全に忘却してパラダイスになってる奴ばかり……。というか全員……。

遊ぶときは遊んで、はじめをつけるのが俺のモットーだ。だから今はオフタイムだ。

ちゃんと、海パンも装備して泳ぐつもりだ。一応、タオルはかけているが……。

唯「あ、クロ君来た」 律「おい、こっちだ！」 黒一（見えてるっつーの……。）「ああ。」

漣「く……。黒一……。／＼」 黒一「ん……。？」 律「はは〜ん、漣ちゅあ〜ん水着で恥ずかしいのかな〜？」

気がつくのと、昼になっていた。皆で昼食をとって再び遊び始めた。

黒一「お前ら……練習……」くらえ、唯！「キャツ！冷たい！この」……自主練しかないか……。」

アイツらに何言ったところで聞き入れてもらえないだろうな……。間違いない……。

それと、楽しそうにしてるアイツらを止めたくないという思いも少しあった。

俺の小さい頃の夢は トモダチ《……》と思いつきり遊ぶことだったからな……。

ん……？歌詞、思いつきそうだな。早速、スタジオに戻るか。

くスタジオく

黒一「曲の方は以前作ったものを見返してみるか……。詞の方は……。」

今までの自分から高校になって変わった自分。さつき得た感覚を元に創作する……。

俺は、不意にPRSを手にとってアンプ＋ヘッドフォンに繋ぎ弦を

弾く。

黒一「『その時の自分』は分からなかった 知らなかった 知りたくもなかった」

） 周りの 人達が羨ましくて　ずっと 心を閉ざしてた

ずっと 一人ぼっちでいた　それでも 構わないと思
ってた」

それでいい　いつか僕にも　幸せが訪れると・・・

でもね　あるとき気がついたんだ　このままじゃね
何も変わらないって」

そうだ　今まで僕が拒んできたもの　今度はねちゃん
と 受け入れてみようかな」

『ある時の自分』ならわかったんだ　開けたんだ　新たな
自分の踏み出す道が」

そして僕は感謝するよ 父さんに母さんに友達へ そし
て・・・『出会い』に・・・

ジャラ〜ン 出来た・・・全部ノリで歌ってたと思う
と我ながら凄げエな・・・。

黒一「タイトルは・・・」
偶然という名の奇跡」

こうして俺の初めての曲が完成した・・・もしかすると、この曲
も『偶然』なのかもな・・・。

4 黒と合宿 part 2 (後書き)

作詞でそこそこ費やしました……。疲れた……………。

最後に黒一君の思った「この曲も『偶然』なのかもな……………」には、

黒一君の色々な思いが含まれています。あえて、言わないという「とで……………」。

読者様のご想像にお任せします方針ですww

感想・アドバイス、待っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1414y/>

けいおん！ ～黒の奏でる旋律～

2011年11月6日03時12分発行